

才商魂士



北海道根室高等学校
商業科・事務情報科通信
令和8年3月24日
文責：城野海舟

視線の先にあるもの

右のイラストを、少し時間をかけて眺めてみてください。

険しい岩場を登っていく二人の高校生。その頭上を舞う、透き通った青い鳥たち。そして足元に置かれた「勉強」「部活」「時間」という言葉。

皆さんは、この絵からどんなメッセージを受け取りますか？

絵が伝えようとしている意味と皆さんに当てたメッセージを考えてみてください。

「修練」の先に見える、本当の自分

「好きと嫌い」「得意と不得意」ってなんだろう



「好きか嫌いか」は、ある程度の「修練」を積み、自分に負荷をかけて向き合ってみない限り、決して見えてこないものです。

かつて私の授業で、簿記が得意ではないのに「簿記の授業がないとつまらない」と言った生徒がいました。厳しいスパルタ式の演習の中で、その子は「無心で何かに打ち込

む時間」そのものに、自分を支える価値を見出していたのです。

「好きを仕事にする」ことは、決して楽な道ではありません。責任に追われ、理想と現実とに苦しむ日も必ず来ます。しかし、泥臭い修練を乗り越えてきた人は、そんな「辛さ」さえも自分の「強さ」に変える力を持っています。

効率よく結果だけを求めず、まずは目の前のことに無心で取り組んでみてください。その苦しい時間が、将来のあなたを支える揺るぎない根っこになり、まだ見ぬ「本当の自分」を連れてきてくれるはずです。

君たちはどう生きるか

—世界を面白がる準備をしよう—

「なぜ、今、必死に勉強し、泥だらけになって部活をするのか。」

それは、君たちが大人になったとき、世界をより深く、鮮やかに楽しむためです。何も知らないまま美術館に行けば、それはただの静かな部屋かもしれません。でも、歴史や技法という「知識のレンズ」を通して見れば、そこは数百年前の人間と対話できる驚きと感動の宝箱に変わります。

この「目」は、机に向かう時間だけでなく、部活で仲間とぶつかり、悔し涙を流す経験からも養われます。他人の痛みを知り、自分の限界に挑ん

だ経験があるからこそ、映画や小説、あるいは誰かの勇気ある行動に、人一倍深く共鳴できるようになるのです。

今、君たちが苦勞して学んでいること、流している汗は、すべて君たちの「感性」という土壌を耕しています。

多くの知識を持ち、豊かな感情を知っている人ほど、人生のあらゆる瞬間を面白がることができる。今、君たちはそのための「最強の武器」を手に入れ、世界を彩る準備をしている最中なのです。